

剣に向き合う、その独特の雰囲気、先生と一緒に味わうことができ
たことは、今でも大切な思い出です。

私は数年前に祖父を亡くしましたが、ほとんど会話を交わすこと
のないまま別れを迎えたため、人の死に対する深い悲しみを感じるこ
とはありませんでした。しかし、両親の次くらいに多くの時間をともに
過ごした先生の死は、私にとって初めて「人の死」の重さと悲しみを、
自分自身で味わう経験となりました。今になって、もっと練習に行っ
ておけばよかった、もっと話をしておけばよかったという後悔の気持
ちが胸に残っています。道徳の授業で、「当たり前前の日常を大切にしな
さい。」「日頃から感謝の気持ちを伝えなさい。」と教えられてきまし
たが、当時の私はそれを綺麗事だと感じていました。しかし今では、そ
の言葉の意味を、身をもって理解できていると感じます。

日々の生活を振り返ってみると、私はあまりにも「当たり前」を粗
末にし過ぎていました。毎日欠かさず弁当を作り、送り迎えをしてく
れる母親。夜遅くまで仕事に明け暮れながらも、家のことを黙々とこ
なしてくれる父親。毎朝私を起こし、どんな話にも耳を傾けてくれる
姉。風呂洗いや洗濯を手伝い、私のことを素直に褒めてくれる妹。冷
静に考えてみると、私はこんなにも多くの支えの中で生きていたのだ
ということに気づきました。それにもかかわらず、自分のことを最優
先にしてきた自分が、情けなく思えてなりません。いつから私は、周
囲よりも自分の立場が上であるかのように錯覚するようになってしま

ったのだろうか、過去の自分に問いかけました。「当たり前」という贅
沢を、身をもって知った瞬間でした。

葬式の日、私は生徒代表としてお別れの言葉を読みました。式場に
漂う線香の匂いが鼻を刺し、祭壇を埋め尽くす鮮やかな花々はただ遠
い景色のように見えました。読み進めるうちに涙がこみ上げ、胸が何
かにぎゅっと締め付けられるような感覚に襲われました。それでも、
最後まで先生に強い自分を見せたくて、必死に涙をこらえました。先
生は生前、豊かな人脈を持ち、さまざまな人と関わってこられた方で
した。葬式には多方面の業界から多くの方が集まり、私に「お別れの
言葉、良かったよ」と声をかけてくださいましたが、余裕のなかった
私は、ただうなづくことしかできませんでした。また、先生は九十歳
ほどになるお母様を、長年真摯に介護されてきました。車椅子に乗り、
背中が曲がったそのお母様が、私に「ありがとうね。」と弱々しく震え
る声でかけてくださった言葉は、今でも強く心に残っています。出棺
前、棺に入った先生の穏やかな顔に手を合わせ、霊柩車へと運ばれて
いく姿を見送りました。式場の外は吹雪で、冷たい風が私の心をさら
に冷やしました。黒い霊柩車の車体に静かに当たって溶けていく雪は、
これまでの明るい思い出の一つひとつが、暗闇へと飲み込まれていく
ように感じられました。

先生の死をどう受け止め、私はこれからどう生きていくのか。いつ
か、どんな形であっても先生に恩返しをしたい、成長した自分を見せ

たいと心から思っています。そのために、私はこれからもそろばんを続け、良い結果を残せるよう努力を重ねていきます。そして、先生の死を通して気づかされた「当たり前」の大切さを噛み締めながら、日々を大切に生きていきます。どうか空の上から、いつまでも私を見守っていてください。先生、それではお元気で。さようなら。

謹白

令和八年一月十五日